

岩下弘史著『ふわふわする漱石：その哲学的基礎と ウィリアム・ジェイムズ』

藤本，晃嗣
米子工業高等専門学校：講師

<https://doi.org/10.15017/6618261>

出版情報：九大日文. 40, pp.29-35, 2022-10-01. Association of Japanese Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

◎書評

岩下弘史著

『ふわふわする漱石』

——その哲学的基礎とウイリアム・ジェイムズ——

FUJIMOTO AKIHISA
藤本 晃嗣

本書は書名にある通り夏目漱石と、アメリカの心理学者であり哲学者でもあるウイリアム・ジェイムズの思想の関連に着目し、漱石の「哲学的基礎」にジェイムズの思想が与えた影響や両者の共鳴関係を論じたものである。その共鳴関係を捉えるキーワードとして表題の「ふわふわ」が用いられ、これが漱石作品を貫く主題として提示される。漱石とジェイムズの関わりはすでに相当の蓄積があるテーマであり、また『文学論』をはじめとした文学理論やその根底にある哲学的認識は、近年の漱石研究において最もレベルの高い議論が行われている分野である。この二つが交錯するところに焦点を定めたという一点だけをとっても、本書に対して敬意を表さずにはいられない。

漱石のジェイムズ受容は二つの時期に分けられる。一つ目は、明治三十五・三十六年頃において読んだとされる『心理学原理』と『宗教的経験の諸相』の受容である。この時期の受容については、従来の研究で主に『文学論』や「文芸の哲学的基礎」、「創

作家の態度」といった漱石が自身の文学観を表明した理論的な文章の根底にある「意識」のあり方に、ジェイムズ心理学が与えた影響が指摘されており、またそれをもとに漱石の作品が考察されてきた。二つ目は明治四十三年の所謂「修善寺の大患」として知られる時期の『多元的宇宙』の受容である。この際漱石は、自身の文学上の考えとジェイムズの哲学上の考えとが「親しい気脈を通じて彼此相倚る様な心持がしたのを愉快に思つた」⁽¹⁾と述べ、高く評価している。この時期以降における漱石晩年の思想とジェイムズの世界観がどのように響き合うのかという問題が、これまで論じられてきた。

本書は従来の漱石とジェイムズをめぐる研究について「未だ不十分なところが多い」(9頁)とし、その理由として「ジェイムズへの理解が断片的になつている」(同)ことを指摘する。そして、漱石が読んだ右の三著以外のジェイムズの著作との関連やジェイムズ思想が展開された背景を視野に入れることで、正確な理解が可能になると述べる。「あとがき」には著者がアメリカに留学したことが書かれており、アメリカのジェイムズ研究の成果を現地で吸収し、研究に活かしたことが推察される。本書ではこの方針の元、ジェイムズ思想に関する精緻な議論が展開され、漱石とジェイムズの新たな関連が追究されている。その中で本書において明らかにされるのは、直接的な受容の問題とともに、「共鳴」や「共振」といった言葉で表現される、時代をともした両者の思想の共通性である。

まず、全体の章立てを示し、各章の概略を紹介する。

はじめに

第一章 (F+G) とジェイムズ心理学をめぐる微妙な関係

第一節 『文学論』の動機 / 第二節 (F+G) と心理学

第三節 「F」と「G」の意義 / 第四節 『文学論』解説

第二章 『文学論』における「文芸上の真」

第一節 「文芸上の真」の背景

第二節 漱石の「文芸上の真」

第三節 『宗教的経験の諸相』との共鳴

第四節 『宗教的経験の諸相』が示唆する「真の事実」

第三章 「文芸の哲学的基礎」と「真に」存在するもの

第一節 漱石の「哲学的基礎」 / 第二節 「理想」の意義

第三節 「還元的感化」の仕組み

第四章 「作家の態度」と「ばらばら」な世界

第一節 「作家の態度」の「極端」な世界観

第二節 「自己本位」の語り

第三節 「ばらばら」な人間と世界

第五章 『多元的宇宙』と漱石晩年の思想

第一節 『多元的宇宙』と「融け合う」世界

第二節 『明暗』における『多元的宇宙』の残響

第三節 「則天去私」に暗示される思想

おわりに

まず「はじめに」で、『吾輩は猫である』から『明暗』まで、対立するもののあわいの領域で「ふわふわ」する存在が描かれていることから、「漱石にとって、「普通ノ人間」はそもそも「ふわふわ」するものだった」(3頁)とする認識が示される。さらに「漱石的存在」が時に「ふわふわ」するのは、世界や命の根本的な存り方を「流れ」のようなものだと考えていた」(5頁)と、「流れ」というあり方と結びつけ、そこから「意識の流れ」を説いたジェイムズとの関連を指摘する。本書のキーワードである「ふわふわ」は、このようにジェイムズが重視した「流れ」と共鳴するものであるとされる。

第一章からは、具体的に漱石とジェイムズの共鳴する関係が論じられていく。最初に問題にされるのは、有名な『文学論』の(F+G)の公式である。「焦点的印象又は観念」とされる「F」を説明する「意識の波」について、漱石が援用したロイド・モーガンの考えの根底に『心理学原理』で説かれた「意識の流れ」があるとする。特に筆者が強調するのが「内観的観察(分頁)の方法であり、ジェイムズがそれにより知覚される「実質的部分」と知覚されない「流れ」とした「推移的部分」とに分けたことをもとに、「F」を「実質的部分」にあたるものと指摘する。しかし、漱石が(F+G)の公式で強調するのは、普遍的に成り立つ「F」と「f」の関係である。『文学論』では普遍的な関係が重視されるのに対して、ジェイムズの「意識の流れ」において強調されるのは、意識されるものが前後の関係によって異なってくるという個別の差異であり、『文学論』と『心理学

原理』には微妙な違いがあるとす。その上で、普遍性を追究するという目的を念頭において『文学論』全体の読みを示す。

第二章では、『文学論』第三編において論じられる「文芸上の真」の問題が検討される。まず、同時代のイギリスにおいても、科学との対比から「文芸上の真」が盛んに論じられていたテーマであったことを指摘する。一般にジェイムズはプラグマティズムの思想で知られるが、その真理観とは「個々人のニーズを満足させる場合に真理が成立する」(72頁)というものであり、「宗教上の真」においても「実在の感情」をもとにした個人的経験を重視するというものであった。これは普遍的に成り立つことを重視する「科学上の真」とは大きく異なる考え方である。漱石の「文芸上の真」もまた「読者の心情に情緒を引き起こす」(77頁)という個人的な経験を重視するものであったという点で、ジェイムズの「宗教上の真」と響き合うものであるとする。

第三章では「文芸の哲学的基礎」の「意識」や「理想」、「還元的感化」といった概念が、ジェイムズとの関連から再考される。「文芸の哲学的基礎」における「意識」のあり方、すなわち「実践的な関心に基づいた理想」をもとに「意識の連続(中略)を能動的に切り拓いていく」という発想が、「ジェイムズ思想と軌を一にする」(96頁)と指摘される。ただし、自己の「関心」によって形成された「理想」による「選択」は、自身の関心事に専心することとなり、文学作品に呼応する読者がいなくなるという意味で、文学の存続を危うくするものである。この

状況を克服するものが、漱石の独自の概念である「還元的感化」であるとす。特に「還元」とは、意識が分化する以前の原初的「oneness」に「還」という意味であり、漱石がこの状態を禅との関連で説いていることから、『宗教的経験の諸相』で説かれた宗教的経験のあり方と共鳴するものであると指摘する。

第四章では、「創作家の態度」で示される「極端に云へば人々個々別々の世界を持つてゐる」²⁾とする哲学的思想が問題にあげられる。「われわれの世界そのもの」が「個々人の関心によって形成されていく」(123頁)というジェイムズの主張が、漱石の「自己本位」、つまり「自己の立脚地」から物事を見ていくという個人主義的見解に、「理論の承認」を与えたものの一つであると推定する。一方でこの認識には、つきつめると「人間がばら／＼」になりそれにより「淋しさ」も深刻なものとなるという弊害が存在する。このばらばらな世界への不安は、漱石の後年の講演でも吐露されており、ここでその克服として「人間の窮屈を融かし合ふ」必要性が訴えられている。この「融かし合ふ」といった表現は、『多元的宇宙』を経ることで可能になったものであるとし、ジェイムズの世界観が漱石を触発したとする。

第五章は、第四章の議論を受けて「思ひ出す事など」の中で見せた『多元的宇宙』への共感が問題にされる。『多元的宇宙』によれば、実在は「流れ」として表される動的なものであり、その中では元来全てのもものが「融け合っている」。これを「内

観」を重視したジェイムズの理論をもとに、他者との関係の在り方として考えるならば、「直観的な共感、同情を持つて他者の生の流れや世界に飛び込むことは、そうした他者の生の流れと「ひとつになる」ことを意味する」(141頁)ものとなる。このようなジェイムズの立場を漱石が共有していたとの認識から、漱石の遺作『明暗』と漱石晩年の思想とされる「則天去私」が検討される。『明暗』では津田夫婦の「融け合う」様が描かれており、そこに先に述べたような「ジェイムズの思想の残響」(155頁)の存在を指摘する。また、「則天去私」についてもジェイムズ思想を根底に他者認識を示すものとして捉え、「私」を「去」り「天」に「則」り「流れ」のなかを「ふわふわ」と漂うなかで、われわれは他の人々の生と「融け合う」(173頁、つまり「人の内側の生に同情や共感をもつて向き合うこと」という「則天去私」解釈が示される。

最後に「おわりに」において、「両者の思想が根本的なところで共鳴していた」(180頁)ことの重要性、そして本書が示してきた「共鳴」として、「この世界の全てが元来「融け合つて」いること、われわれが同情や共感を持って世界や他者に接することとそれらと「ひとつになる」こと」(181頁)という『多元的宇宙』の主張と、「根源的な「oneness」の状態に「ふわふわ」と立ち還ることで得られる他者や世界との和合」(同)という漱石の晩年の思想の関連が強調される。

次に評者の興味・関心にひきつけて、本書の特徴とその意義、疑問に感じた点、また本書の示唆を受け評者なりに考えた今後の論点などを述べておきたい。

『文学論』を対象とした第一章、第二章では冒頭に示されたジェイムズ思想が展開された背景をもとに読み込むという戦略が特に効果をあげている。従来の研究においても、ジェイムズの「意識の流れ」の「実質的部分」と「推移的部分」に漱石が注目していたという指摘はされている³⁾。ただ、それを『文学論』の「F」の問題として提示したのは従来にはない独自の見解である。特に従来のジェイムズとの関連においては、「推移的部分」への注目が強調される傾向にあった。それに対して本章では、「F」と「実質的部分」との共通性を考察し、それにより「F」の特質を明らかにしている。

また、第二章に見られる『宗教的経験の諸相』を「文芸上の真」の問題と関連させるという点も新しい切り口である。従来『宗教的経験の諸相』は、「潜任意識」や「回心」の問題として追究されることが多かった⁴⁾。このような直接的な影響ではなく、ジェイムズ思想が展開された背景、「科学上の真」に対する「文芸上の真」や「宗教上の真」という同時代の問題を追うことで、漱石とジェイムズの共鳴を明らかにしていくというのは、本書の戦略により新たな知見が得られる好例である。

さて、第一章で強調されるのは、『文学論』の普遍性への志向が、個別の差異を重視するジェイムズの心理学説と「微妙な関係に立っている」(44頁)という点であり、その前提として第

一節において『文学論』の普遍性への志向が確認される。ところで本書の元となった博士論文の「要旨」⁽⁵⁾を見ると、(F1)について「個々人の解釈の違い」という点が重視されている。これは、この章のもとなつたと思われる論文⁽⁶⁾においても同様である。そうすると、本書において何らかの理由で『文学論』の普遍性への志向を強調する形に修正したものと推察される。確かに第一章第四節ではこの指摘に基づき、『文学論』全体を普遍性への志向から読解しているが、第二章において、再び「文芸上の真」として個別性を強調する論になつている。このことを考えると、特にここで『文学論』の普遍性への志向を強調し、ジェイムズ心理学との「微妙な関係」を指摘したことは、本書としてどのような意図があるのだろうか。

第三章での「還元的感化」を『宗教的経験の諸相』の宗教的経験とあわせて考察するという議論は、個人的には最も啓発を受けた。ここで指摘された両者の共鳴をより明確化するためには、漱石の禅認識とジェイムズ受容の問題を避けて通ることは出来ない。すでに「ジェイムズを読む漱石の念頭に、仏教とりわけ禅の思想があつたらしい」⁽⁷⁾という指摘もある。筆者は注意深く、悟りを経験したことのない漱石の発言を禅や仏教と結び受けることに慎重になるべきと述べる(109頁・注39)が、漱石は、「文芸の哲学的基礎」を発表した前後に、『禅門法語集』⁽⁸⁾を読むなど禅に関心を向けており、自らが経験していない悟りや悟入のイメージを禅書から得ていたことが考えられる。特に本章では「還元的感化」の「還」の構造の重要性が指摘されてい

るが、漱石が触れた公案を中心とする看話禅に見られるように、禅もまた悟入において「還」の構造をもっている。漱石の文学観、特に「還元的感化」に禅の思想がいかに影響したのかという点は、今後追究されるべき課題である。

第四章では、ジェイムズ思想が漱石に与えた影響の両義性、個々の「態度」によつて形成される「ばら／＼」の世界というあり方が、漱石の「自己本位」の根拠になつたという肯定的側面とともに、晩年の「淋しさ」を惹起するものであつたことを抉出し、漱石の主題にジェイムズ思想がいかに深く浸透していたかが示されている。

第五章について、これまでも漱石晩年の思想におけるジェイムズの重要性は指摘されてきた⁽⁹⁾が、その理由として、ジェイムズと「親しい気脈を通じて彼此相倚る様な心持」がした点を漱石が明確に語っていないことがあげられる。本書では、この共感の核心を、「真に実在するものを意識の連続」(139頁)に見据えている点と、「外側」からの理解ではなく、共感により「内側」の観点に身をおくべき(140頁)という他者理解をもとに、「融け合う」というあり方に見ている。そしてそれをもとに『道草』と比較して『明暗』における他者認識の深まりが指摘される。この点について、『多元的宇宙』の受容を重視する筆者にとつて、この両作品の差異はいかなる理由で生じたと考えられているのだろうか。『多元的宇宙』を読んだのは明治四十三年であり、その後の漱石は『行人』や『こゝろ』のような、人間

がばらばらな世界を突き詰めていく。仮に漱石が晩年に本書で示されるような世界を希求したとしても、その契機としてジェイムズ以外の要素を視野に入れる必要があるのではないだろうか。

またこのような『明暗』解釈を受けて、「則天去私」が検討されているが、この部分の論述は結論を急ぎ過ぎているように感じる。何より、「則天去私」という言葉は「東洋的な心境の表現とみなしうる」⁽¹⁰⁾という指摘もあるように、東洋的な思想との関連が考察される必要がある。本書は、「漱石とジェイムズの議論が共鳴する箇所に「焦点」を当ててきた」^(179頁)ことを強調しているように、可能な限り漱石のテクストからジェイムズ的な問題や要素を引き出すことを試みたものと思われるが、どこまでジェイムズとの関連で捉えるべきか、その可能性と限界を考えさせられた。

最後に一点、漱石は確かに小説家となる前は大学講師であり、英文学・文学研究者であった。実際、近年『文学論』の研究は盛んである。しかし評者はあくまでも漱石の業績の軸は小説作品にあると考えている。そう考えた時、やはり本書で明らかにされた漱石の理論や思想と小説作品の関わりについて、『明暗』以外にも検討を広げて欲しい。「ジェイムズの思想を適切に踏まえることは、漱石テクストの新たな可能性を開くことにもなるだろう」^(9頁)とある通り、本書の議論により作品のどのような読みが可能になるのか、ということが示されるのを期待するのは評者だけではないはずである。

以上、漱石とジェイムズの関連という関心にひきつけたため、本書副題のもう一つのキーワードである「哲学的基礎」という点、特に『文学論』をはじめとした漱石の文学理論の研究における意義などについて、評者の力量不足により言及が少なくなってしまった。とりわけ評者はジェイムズと禪の共通性に関心が強く、それゆえ雑駁な私見は著者の論点にとつて的外れなものも多いと思う。本書は緻密な議論を展開しつつ、漱石とジェイムズの「共振」をもとに、漱石の思想や試みを、ジェイムズが奮闘した当時の西洋哲学の最先端の問題へと広げるといって、きわめて射程の大きな問題意識も兼ね備えており、浅学な評者が著者の議論を適切に読み取れなかった点も多くあるものと思われる。ただ、すでに「今後の漱石研究者が避けて通ることのできない一冊」⁽¹¹⁾という評価がある通り、ジェイムズと漱石の関連に関心がある者だけではなく、漱石の文学的試みを考える上で必読の一冊であり、本書の重要性から書かせていただいた。妄評を著者ならびに読者が御海容下されば幸甚である。

【注記】

- 1 「思ひ出す事など」第三回（『定本 漱石全集』第十二巻、岩波書店、二〇一七年九月、364頁）
- 2 「創作家の態度」（『定本 漱石全集』第十六巻、岩波書店、二〇一九年二月、164頁）
- 3 小倉脩三「漱石におけるウイリアム・ジェームズ受容について（I）」（『夏目漱石——ウイリアム・ジェームズ受容の周辺』有精堂、一九八九

年二月) など。

- 4 重松泰雄「自己検証の旅―「坑夫」・意図と方法―」(『漱石 その歷程』おうふう、一九九四年三月)、小倉脩三「ウイリアム・ジェームズ『宗教的経験の諸相』の影響」(『漱石の文学理論』翰林書房、二〇一九年十一月) など。

- 5 「論文の内容の要旨」(URL:<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/2001803#:v=1Z436P2UK> 二〇二二年八月十日閲覧)

なおこの「要旨」には『文学論』がある種の普遍性を求めていることも事実である」という記述もあるが、限定的なものとして扱っている。

- 6 岩下弘史「夏目漱石とウイリアム・ジェームズ ―『文学論』の「上」について―」(『文学』二〇一四年九月)

- 7 『夏目漱石事典』(學燈社、一九九二年四月)の「比較文学事典(ウイリ

アム・ジェームズ)」(佐々木英昭執筆、250頁)

- 8 漱石田蔵書にある『禪門法語集』(光融館)は「正篇」が明治四十年三月五日発行の第五版、「続編」が明治四十年六月三日発行の第四版である。

- 9 重松泰雄「漱石晩年の思想―ジェームズその他の学説を手がかりとして―」(『漱石 その新たな地平』おうふう、一九九八年五月、311頁) など。

- 10 『夏目漱石事典』の「作家論事典(則天去私)」(三好行雄執筆、177頁)

- 11 『図書新聞』3509号(二〇二二年八月二十八日号)掲載の本書に対する服部徹也氏による書評より。

(二〇二二年三月 東京大学出版会 二〇八頁十索引 五〇〇〇円十税)

(米子工業高等専門学校 講師)